

近況三題

— ブライズ先生・尹東柱^{ユン・ドンジュ}・「鳴門^{なると}の第九」 —

宗片邦義

小学生（国民学校）の頃は戦争中だった。アメリカを相手に。戦争が始まったのは私が一年生の十二月八日。昭和十六（一九四一）年、東北地方は大雪だった。登校直前の朝の臨時ニュースだった。日本が戦争を仕掛けたのだ。それから三年半、心身共に辛い日々だった。

戦争末期、学校では、「最後の一人まで戦う」と教えられ、「最後は神風が吹いて、日本は必ず勝つ」と信じ込まされていた。大学生等は学徒動員で、戦争へ狩りだされていた。

私の町（山形県温海温泉^{あつみ}）には東京小岩から学童疎開がやってきていた。交流はなかった。昭和二十年三月、上級生は東京へ帰っていった。だが東京で爆撃に遭い皆亡くなったと後から聞い

た。国と国との戦いであつたが、殺されたのは兵隊だけではなく国民だつた。

五年生の夏、八月十五日、ラジオで天皇陛下の玉音放送なるものを聞いた。だが意味は分からなかつた。中学(現高校)から帰ってきた兄が、「座敷に座れ。負けたんだ。どうする。切腹する覚悟はあるか」と言つた。「敵は鬼畜米英」、「負けたら皆殺しになる」と言われていた。この日のことは今も鮮明に記憶している。

私はこの時以来、文部省を、その言いなりになる教師や教科書を、時の政府を、信用しなくなつた。また、新聞・ラジオの報道を鵜呑みにできないことを知つた。

この戦争中の三年半は、心身共に、辛い嫌な思いをした。そして敗戦。亡くなつた人は帰らない。なんと多くの犠牲を払つたことか。これからは絶対に戦争をしてはいけない。新憲法ができた。「戦争放棄」の言葉に、国民はどんなに喜んだことか。それ以後、聖徳太子の「和をもつて尊しとなす」と並んで、日本国民の二大生活信条となつた。

しかし最近、それが危うくなつてきた。『ハーバード日本史教室』(佐藤智恵著、中公新書フクレ)によれば、外国で日本が尊敬されている理由に、この二つが挙げられているが。

中・高・大とは、青春を生きる精神的な苦悩を体験したが、戦争がないだけ、本当によかつた。日本は世界各地の戦争に巻き込まれずやつてきた。自分自身も人生の大半を、好きな職業に従事し、好きな研究に没頭できたことは、本当に幸せであつた。

八十を過ぎた近年は、専ら活動の社会性ということを考えるようになった。社会人類の福祉発展に

いささかでも貢献できないか。どうしたら人間は争わず、戦争せずに、互いに信頼し尊敬し合って、生き甲斐ある人生を全うまっとうすることができるのか。国際関係においても、どうしたら互いに信頼し尊敬しあつて、その関係を享受し発展させることができるのか。これがこのエッセイの眼目のつもりである。

一

昨年（二〇一九）三月二四日に、東京銀座の観世能楽堂において、新作能『たかわぎる者―ヘンリー・ソローとR・H・ブライズ―』を、観世流能楽師の津村禮次郎氏に上演していただいた。

上皇様が皇太子の頃の英語の家庭教師と言えば、年配の多くの方はアメリカ人のヴァイニング夫人を思い起こされるであろう。だがもう一人英国人で、二十年近く教えられたブライズ先生という方がおられたことは、一般には殆ど知られていない。それで上皇さまが退位を表明された折、ブライズ先生をシテ（主人公）にして、新作能をぜひ制作したいと思つたのだつた。

ブライズ先生は、一九四六（昭和二十一年）年、日本敗戦の翌年から、先生が亡くなられる六四年までの一九年余り、学習院大学教授として、また皇太子の英語家庭教師として、さらに多くの大学や外務省研修所やその他で、英語英文学を教授された。だがご自身は、人間の生き方を教えるのが狙いであつたようだ。私は先生の晩年、足かけ九年間、茗荷谷の東京教育大学（現筑波大）で、英文学講義やゼミに出席させていただいた。上皇様が美智子様と御婚約そして結婚された時期であつた。

さて、ブライズ先生をシテにした能であるが、題は「たたかわざる者」とし、副題に「ソローとブライズ」とした。それは先生が、「恐らく最も偉大なアメリカ人」と呼んでいた人物がヘンリー・ソローだったからである。

ソローは一九世紀アメリカの作家で、非暴力や生命尊重や奴隷制反対を訴えて、インド独立の父ガンディやアメリカ公民権運動の指導者キング牧師などに大きな影響を与えた。対メキシコ戦争に反対して納税を拒否し投獄されたことがある。

ブライズ先生は、第一次世界大戦（一九一四—一八）中、十八歳になり、兵役を拒否した。「ドイツはイギリスの敵でも、ドイツ人は私の敵ではない。私は人を殺すことはできない」と。そしてロンドンの刑務所に収監され、二年間労役に服した。いわゆる良心的徴兵忌避者（conscientious objector. CO）であった。時の政府によって変わる国の法律等ではなく、自らの良心に従って生きるという。十八歳にしてそう決意した青年であった。

ドイツ敗北に終わった戦後、解放されてロンドン大学に入学、英文学を専攻し、夏目漱石も聴講したW・P・ケア教授に教わった。その後、当時日本統治下にあった朝鮮の京城帝国大学予科に英語教師として赴任した。

さらに昭和十五（一九四〇）年、金沢の四高（現金沢大学）に移り、翌年から太平洋戦争終結までの三年半は、神戸の敵国民間人收容所に収監された。その間著述に専念し、戦後解放され、鈴木大拙等の推薦で学習院大学に迎えられた。